

パウロのアラビヤ…まず、祈る時を！

「異邦人の間に御子を宣べ伝えさせるために、御子を私のうちに啓示することをよしとされたとき、私はすぐに、人には相談せず、先輩の使徒たちに会うためにエルサレムにも上らず、アラビヤに出て行き、またダマスコに戻りました。」

(ガラテヤ人への手紙1章16～17節)

使徒パウロは、あの劇的な回心の後、(ルカが書いた『使徒の働き』にはその記述がないのですが)パウロ自身が書いた『ガラテヤ人への手紙』(上掲のみことば)によれば、まずアラビヤに出て行ったことが分かります。おそらく、ここで言う「アラビヤ」とは、地理的には、いわゆるアラビヤ半島の砂漠地帯ではなく、もう少し手前のダマスコの東南にあったナバテヤ王国(その中心地の一つ「ペトラ」は現在、世界遺産)の辺りではないかと考えられています。

ところで、パウロのそんな“アラビヤ”滞在は一体、何のためだったのでしょうか？もちろん、異邦人宣教の一環ではなかったかとの考えも少なからずありますが、多くの註解者は、より個人的な事情、おそらく祈りと黙想のためだったのではないかと考えています。確かに、聖書に登場する“神の人”と言われる者たちは、その活動の第一線に出る前に、しばしば荒野や寂しい所に退いて、まず、神との深い交わりを持ったのではなかったでしょうか？・・・パウロの“アラビヤ”、モーセの“ミデヤン”、そして、主イエスの“荒野”。

ルターは「2時間は祈らねばならないほど忙しかった」(卓上語録)と言ったそうですが、私たちも、多忙な時ほど、重要な時こそ、まず一旦立ち止まって、祈りましょう！

母なるとりなし

「…あなたがたは乳を飲み、わきに抱かれ、ひざの上でかわいがられる。母に慰められる者のように、わたしはあなたがたを慰め、エルサレムであなたがたは慰められる。あなたがたはこれを見て、心喜び、あなたがたの骨は若草のように生き返る。…」

(イザヤ書 66 章 12～14 節)

思い返してみてください。…あなたの幼かった頃、あなたの母親は、文字通り、あなたの尻拭い(=おむつ交換)をはじめ、あなたがやりたくてもできなかったことを全てとりなして下さったのです。あなたが今こうしてあるのは、そんな母親のとりなしがあったからこそではないでしょうか?…今日は「母の日」です。

有名な話ですが、アウグスチヌスはその若い頃、放縦な生活に身を任せ、靈的には異端にまで走ってしまう始末でした。しかしながら、その背後で、彼の母モニカは来る日も来る日もとりなしの祈り、涙の祈りをささげていたのです。そして、そんな母モニカの涙のとりなしのうちに、やがてアウグスチヌスは回心し、後に「古代最大の神学者」と言われるまでになりました。

讚美歌 510 番の 4 節の歌詞が浮かびます。「汝がために祈る母の、いつまで世にあらん。とわに悔ゆる日の来ぬ間に、とく神に返れ。春は軒の雨、秋は庭の露。母は涙、乾く間なく、祈ると知らずや。」。

あなたがこうして救われ、天に国籍を持つようになった背後にも、必ずや誰かの「母なるとりなし」があったはずです。そのことに感謝の思いを馳せながら、今度はあなたが、誰かの救いのために「母なるとりなし」をする番なのではないでしょうか?

やめることは、始めること！

「やめよ。わたしこそ神であることを知れ。わたしは国々の間であがめられ、
地の上であがめられる。」
(詩篇 46 篇 10 節)

先日、電車に乗っていましたら、結婚式場として知られる軽井沢高原教会のキャッチコピーに「何かをやめてみるのも、はじめることです」とありました。確かに、何かを「やめる」ことは単なる終わりではなく、むしろ、そこから新しい何か「始まる」ということでもあるのではないのでしょうか？「終着駅は始発駅」と言われます。

上掲のみことばのように、聖書は私たちに問い掛けてきます。「やめよ。わたしこそ神であることを知れ。」と。また、こうも言われます。「主があなたがたのために戦われる。あなたがたは黙っていなければならない。」(出エジプト記 14 章 14 節)。ともすると、私たちはつい神を差し置いて、出しやばってしまうということなのではないのでしょうか？ゆえに、時に「やめる」必要、「黙る」必要があるのです。ある方は言いました。「私がやる時、私がやるだけ。しかし、私がやめる時、神がやって下さる!」。私たちは神に行動していただくために、時に、何かを敢えて「やめる」という勇気ある撤退、信仰的停止が求められるのではないのでしょうか？

よく言われますように、「正」しいという漢字は、「一」と書いて、その下に「止」まると書きます。すなわち、私たちが「正」しい判断をし、「正」しく行なうためには、やり続けなくて、時に、神の前に「一」旦、立ち「止」まる、「一」旦、やっていることを「止」めるということがむしろ大事なのではないのでしょうか？

出エジプトしたイスラエルは、まさに退路を断ち、やめて、要所要所で立ち止まった時、そこに大いなる神のみわざを見ることになったのです。さあ、やめましょう！

測り知れない主の知恵と力の大きさ、その愛と恵みの深さ

「あなたは知らないのか。聞いていないのか。主は永遠の神、地の果てまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。」

(イザヤ 40 章 28 節)

「人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。」

(エペソ人への手紙 3 章 19 節)

以前、私が狭心症の検査を受けるためにある病院に行きましたところ、検査をする機器がその許容量を越えた私の体重に耐え切れない可能性があり、検査がすぐにできなかつたことがあります。最新機器を備えたその病院も私を受け留めることができませんでしたが、主なる神様はどんなに大きく深い私たちの罪をも、より大きくて深い懐でしっかりと受け留めて下さるのです。そんな神様に自分自身を明け渡しましょう。

かつて、ある温泉の脱衣場で、そこに置いてあった体重計に乗りましたところ、針が振り切れて、体重が量れなかつたことがあります。私の体重はそんなに重いのかと唖然としましたが、主なる神様はそれ以上に私たち一人一人を重く(地球よりも重く)受け留めて下さるのです。また、そんな神様の私たちに対する愛と恵み、知恵と力は、それこそ測り知れないほど大きく深く、決して過少評価されてはなりません。

ある時、一人の釣り人が大きな魚を釣ってはリリース(放流)し、比較的小振りの魚だけを捕獲しておりました。不思議に思った見物人が聴き質したところ、釣り人はこう答えたのです。「いえね、うちのフライパンは小さいんですよ!」。私たちはその小さな頭脳ではなく、無限の広がりをもった信仰で、主なる神様を受け留めましょう。

挫折がバネに、迫害がリバイバルに！

「ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」

(コリント人への手紙第二 12 章 10 節)

女子卓球界で今、若干 17 歳の平野美宇選手が快進撃を続け、世界に衝撃を与えています。ことに、出場できなかった 2016 年リオ・オリンピック直後、同年 10 月のワールドカップで 16 歳の最年少で日本人初優勝。今年(2017 年)の 1 月の全日本選手権では、世界ランク 4 位で日本人選手トップの石川佳純選手を決勝で破っての最年少優勝。そして、つい先日、中国で開催されたアジア選手権では、完全アウェーの中、中国のトップ 3、世界ランク 1 位の丁寧選手、2 位の朱雨玲選手、5 位の陳夢選手をことごとく撃破して、見事、こちらも 17 歳で最年少優勝を果たしました。

平野選手自身も語っておりますように、そこには、リオ・オリンピックの選考に惜しくも漏れ、同い年で出場を果たし、団体に銅メダルを獲得した伊藤美誠選手などの活躍を、補欠選手として応援に回った中で目の当たりにした悔しい体験、自らの弱さを痛感した挫折がやがてバネとなり、現在の彼女の原動力になっているのです。

キリスト教 2000 年の歴史は、振り返ってみますと、血の歴史であり、迫害と挫折の歴史でもあったのではないのでしょうか？教会は、ステパノの殉教をはじめとして、度々、自らに大いなる弱さを感じました。しかしながら、その弱さがキリストのゆえに強さへと変えられ、むしろ、キリスト教は迫害や挫折の度に成長・拡大を遂げてきたのです。諸教会に弱さが感じられる昨今、改めて、主にある強さに期待しましょう。

クリスチャンの“ひとしずく”

「そこへひとりの貧しいやもめが来て、レプタ銅貨を二つ投げ入れた。」
(マルコの福音書 12 章 42 節)

南米はアンデス地方に伝わる民話に「ハチドリの一としずく」というお話があります。以下、全文を引用します。

「森が燃えていました。森の生き物たちは、我先にと逃げていきました。でも、クリキンディという名のハチドリだけは行ったり来たり。口ばしで水のしずくを一滴ずつ運んでは、火の上に落としていきます。動物たちはそれを見て、『そんなことして、一体何になるんだ』と笑います。クリキンディはこう答えました。『私は、私にできることをしているだけ』。」(『ハチドリの一としずく』辻信一監修[光文社])

この話は、一人一人ができることをすることの大切さを教えてくれると同時に、もし、他の多くの者たちも、それに倣って、自分にできることをしていくなら、それは大きな力となり得ることを示唆しているのではないのでしょうか？

かつてマザー・テレサは、反対者から「あなたのしていることにどれだけの意味があるのか？ 社会変革には程遠いのではないか？」とその活動を非難された時に、こう答えたと言います。「大海の水も一滴のしずくから始まる」。一人一人の力はハチドリの一としずくの如く非力かもしれませんが、それが寄せ集まる時に大きな力となり、さらに、そこに神の御手が働く時にそのひとしずくは私たちの想像を超えて大きく用いられるのではないのでしょうか？ ぜひ、あなたの“ひとしずく”、一タラント、二レプタ、二匹の魚と五つのパンを神の前に差し出しましょう！

みことばに生きる ー聖書という望遠鏡を通してー

「・・・人はパンだけで生きるのではない、人は主の口から出るすべてのもので生きる・・・」
(申命記8章3節)

ある方は言いました。「みことばは“読む”ものではなく、“聴く”ものです」と。すなわち、みことばは、ただ文字面を眺めるだけではあまり意味がなく、それではまさに絵に描いた餅です。そうではなく、まず、神の語り掛けとして、みことばに聴き、そして、ただ聴くだけでなく、それを実践・実行して初めて意味がある、ということなのではないでしょうか？

今年の御茶の水の聖句は、この面の最上段にありますように、「みことばを実行する人になりなさい。」(ヤコブの手紙1章22節)です。これは、簡単なようで、なかなか難しいことです。みことばを実行するためには、それをただ表面的に知っているだけでは不十分で、そのみことばを深く理解していなければなりません。また、そのみことばが生活の中心に据えられている必要があるのではないのでしょうか？

先週の『今日の力』(火曜日)に、下記の詩(P. ブロックス)が引用されていました。聖書は望遠鏡のようなもの。もしその望遠鏡を覗き込めば世界の先まで見える。

でも望遠鏡自体を見るだけでは、見えるのは望遠鏡だけ。

聖書は先にあるものを見るために覗き込むものである。

でもほとんどの人は聖書をただ見るだけ。その人が見るのはただの活字だけ。聖書のみことばという“望遠鏡”を通して、世界を、人生を、そして、はるかかなたの天の御国をも見て参りましょう。それがみことばに生きるということなのです。

「盛る」のではなく、「盛られる」のです！

「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるものではありません。だれも誇るものがないためです。」

(エペソ人への手紙2章8～9節)

アメリカでは、ちょっと大げさな話を聞いた人が「それは説教者の話だよ (It's Preacher's story.)」などと言って揶揄することがあります。つまり、今風に言えば、説教者は時に“話を盛(も)る”傾向があるということなのではないでしょうか？私自身、穴があつたら入りたいくらいです。ちなみに、“話を盛る”とは、「誇張する」を意味する若者言葉の一つで、「大げさに言う」、「よく見せようと話す」などと言いたい場合に使われます。

(先週の朝の礼拝説教で観ました)アナニヤとサツピラ[使徒の働き5:1～]は、まさに、“話を盛る”ことをしてしまったのではないのでしょうか？正直にその献金が土地の代金の全額ではないことを言えば何の問題もなかったものの、自分たちをよく見せようとして、話を盛ってしまったわけです。もしかしたら、今、国会の場を騒がせている問題もこの類かもしれません。

ところで、アナニヤとサツピラの姿は、現代の「クリスチャンのエリートイズム(エリート主義)」を反面教師として如実に指摘しています。私たちクリスチャンは、上掲のみことばのように、恵みのゆえに、神からの賜物として救われたにも関わらず、あたかも自分の業績のようにそれを誇ってしまっていないのでしょうか？・・・救いの恵みは、私たちが「盛る」ものではなく、神様によって「盛られる」ものなのです。

環境が変わるあなたへ

「あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」
(箴言 3章6節)

「終着駅は始発駅」。終わりは始まりでもあります。とくに春は、一つの区切りや別れの季節でもあると同時に、新しい始まりや出会いの季節ではないでしょうか？ただ、そのように環境が変わる際には、それなりのエネルギーを必要としますし、必ずしも嬉しいことばかりではないかもしれません。新しい出発をしたものの、はたしてこれでいいのかと不安になることもあるでしょう。

そんなあなたに、一つのみことばを送りたいと思います。旧約聖書の格言集『箴言』からの一節です。「あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」(箴言 3章6節)。慣れない新しい環境でも、そこに共にいて下さる主なる神をこそしっかりと見上げていく時、迷いはなくなり、その歩む道は真っ直ぐにされるというのです。

古代の船乗りは、闇夜に天を仰ぎ、そこに輝く星を見て、それを指標に正しい方向へと航海したものです。私たちも、どのような環境にあっても、見上げれば必ずそこにいて下さる主なる神を決して見失わず、そんな主なる神をこそしっかりと認めて歩んでいきたいと思います。

昨年末に天に召されたシスター渡辺和子さんのベストセラーに『置かれた場所で咲きなさい』という本がありましたが、私たちが置かれた場所で咲くためには、環境が変わっても決して変わる事のない神を見上げ、主を認めていくことが必要なのです。

神様は“ドラえもん”ではない!?

「イエスは涙を流された。」 (ヨハネの福音書 11 章 35 節)

つい先日、息子と一緒に映画「ドラえもん：のび太の南極カチコチ大冒険」を観てきました。・・・もし、“ドラえもん”が実在したら・・・「どこでもドア」での瞬間移動で、通勤やお出かけはラクラク。「タケコプター」で首都高の渋滞や長蛇の列を回避。極めつきは「神様ロボット」、三回願い事を叶えてくれるという優れものです。“ドラえもん”は、そんなあったら嬉しい「ひみつ道具」をその「四次元ポケット」から次々と引っ張り出しては、のび太を助けてくれるのです。

ところで、私たちの信じる神様は、全知全能の神であり、そんな神様にとって、悪以外、不可能なことはありません。しかし、だからと言って、神様は私たちにとっての“ドラえもん”、すなわち、願いを叶えてくれるためだけの存在では必ずしもないのです。もちろん、私たちの願望と神様のみこころ(=私たちの真の必要)が合致すれば、結果的に、叶えて下さるということもあるでしょう。ただ、見誤ってはいけないことは、神様は決して私たち人間の「神様ロボット」ではないということであり、また、神様は人格(=神格)のあるお方であり、私たち人間に対して、むしろ主権者であられるということです。そして、また、そんな神様はその全能を時に現わし、時に秘めつつ、何よりも私たちのそばに寄り添っていて下さるお方なのです。

かつて「ど根性ガエル」という漫画～アニメがありました。Tシャツに貼りつけた「平面ガエル」の“ぴょん吉”は、自らを犠牲にして、常に「ひろし」と一体で、喜怒哀楽を共にしたのです。神様は、むしろ“ぴょん吉”に近いかもしれません!?

“これしかない”という歩み

～排他的にではなく、献身的に！～

「子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行ないと真実をもって愛そうではありませんか。」

(ヨハネの手紙第一 3 章 18 節)

ペテロは「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間には与えられていないからです。」(使徒の働き 4 章 12 節)と説教しました。また、それ以前に、主イエス・キリストご自身、こうおっしゃっておられます。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」(ヨハネの福音書 14 章 6 節)。

要するに、救いというものは、主イエス・キリストを通してでなければあり得ないということなのではないでしょうか？決して「分け登る麓の道は多けれど、同じ高嶺の月を見るかな」ではない、つまり、どんな宗教を信じていても結局、行き着くところは同じ・・・ではない、ということです。

ただ、問題は、そのことを声高に語ったところで、全くもって説得力はないということです。かえって多くの方は心を閉ざすのではないのでしょうか？排他的、消極的に他の救いの可能性を否定するのではなく、むしろ、“これしかない”という肯定的、献身的な歩みや行動を通して、私たちが「この道にこそ救いがあるのだ！」ということを証ししていく以外にはないと思うのです。私たちが心から喜んで、その“キリスト道”を行く時に、多くの人々は自ら進んで後に続こうとするのではないのでしょうか？

何を上げるのか？

「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。」

(使徒の働き 3章6節)

朝、起きがけに、息子が「コーラ飲んでもいい？」と聞いてきたら、私はおそらく「コーラッ」と怒るだけでなく、水か牛乳でも差し出して、こちらを飲みなさいと勧めるでしょう。私は息子の欲望(desire)ではなく、必要(need)にこそ応えたいからです。

上掲のみことばは、生まれつき足のきかない男が施しを求めてきた時に、ペテロがそれに対してどう応じたかが描かれています。男はお金を求めたと思われませんが、ペテロはお金ではなく、主の名による癒しを与えています。もちろん、ペテロがお金を持っていなかったこともありますが、ここにはそれ以上の意味があるのではないのでしょうか？

確かに、お金の方が手っ取り早いと考えることもできるでしょう。ただ、仮にお金を与えても、それを使ってしまった後は、引き続き、男には同じ問題が付きまとうこととなります。しかしながら、ここでペテロが与えた主の名による癒しは、根本的に彼の生活を立て直し、彼が自立するのに大いに役立ったのであり、さらには、主の名による救いにもつながるものだったのではないのでしょうか？男は「おどり上がってまっすぐに立ち、歩きだした。そして、歩いたり、はねたりしながら、神を賛美しつつ、ふたりといっしょに宮にはいって行った」(8節)のです。

貧困地域で活動する方はよくこう言います。「飢えた子供に魚を差し出すよりは魚の釣り方を教えた方がいい」。福音宣教も魚の釣り方を教えることに他なりません！

一致が期待できる人間関係とは？

「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」
(ヨハネの福音書 13 章 34 節)

人間関係で悩む人は少なくありません。そんな人間関係を見詰め直す上で大切なことの一つは、私たちがそれぞれ人間関係についてどのような基本姿勢を持っているかということなのだとされます。精神科医のトーマス・アンソニー・ハリスは、交流分析において、人間には以下の四つの基本姿勢があると指摘しました。

第一に、“I am OK, You are not OK”、すなわち「自分は良いが、あなたは良くない」という姿勢で、やや自信過剰、極端になり過ぎると独善的になりかねません。第二に、“I am not OK, You are OK”、すなわち「自分は良くないが、あなたは良い」という姿勢で、自分に自信がないというか、セルフイメージが低い方にこの傾向があるかもしれません。第三に“I am not OK, You are not OK”、すなわち「自分も良くないが、あなたも良くない」という姿勢で、かなり悲観的な傾向があるのではないのでしょうか？そして、第四に、“I am OK, You are OK”、すなわち「自分も良いが、あなたも良い」という姿勢で、いい意味で楽観的、より前向き・肯定的なのではないのでしょうか？そして、そこには自分も他者をも認める広さがあるのです。

私たちが“共に生きる”存在として、まさに「共存共栄」していくためには、最後の第四の基本姿勢、“I am OK, You are OK”、すなわち「自分も良いが、あなたも良い」という姿勢が欠かせません。そして、このような基本姿勢にこそ、一致、すなわち、主にあつて「一つになる」可能性が残されているのではないのでしょうか？

後の者が先になる・・・

「このように、あとの者が先になり、先の者があとになるものです。」

(マタイの福音書 20 章 16 節)

先日のバレンタイン・デー(2/14)に、チョコなんて到底もらえないと思っていた男の子に、予想を大きく裏切って、本命のチョコが贈られたような、アンビリーバブル(信じられないような)話が飛び込んできました。私の弟がメールをしてくれて、この嘘のような本当の話を知りました。

それによりますと、同日、岡山県笠岡市で開かれたマラソン大会の、小学三年生から六年生までがエントリーできる三キロ・コースの部で、その珍事は起きました。263人が参加したその部では、262人が正規のコースではない誤ったルートを走り、実際には二キロ余りを走ってゴールしていました。ところが、かなり遅れて走っていた最後尾を走る一人は、係員が後ろから付き添う形で走ったために、正規のルートに導かれ、彼だけが正規のルートを走りきったことになったのです。それゆえ、前を走っていた262人は全員失格となり、最後にゴールした児童が優勝者として表彰されました。

この出来事は、私たちに上掲のみことば「あとの者が先になり、先の者があとになるものです」を思い出させるだけでなく、下記のこんなみことばも思い出させてくれるのではないのでしょうか？

イザヤ書 30 章 21 節「あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから、『これが道だ。これに歩め。』と言うことばを聞く。」。

私たちに伴って下さる主なる神を覚えつつ、その背後から響く聖霊の御声に従って、みこころにかなう正しい道をこそしっかりと、じっくりと歩みたいと思います。

バスがダメなら飛行機があるさ

「天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。・・・泣くのに時があり、ほほえむのに時がある。嘆くのに時があり、踊るのに時がある。」
(伝道者の書3章1、4節)

稀勢の里が綱を締め、横綱土俵入りを披露する日が来ることを、どれだけ多くの茨城県民が待ち望んでいたことでしょうか？魅力度ランキング三年連続最下位で気持ちも沈んでいた茨城県民は、茨城県出身の横綱の誕生を心待ちにしていたのです。

しかしながら、いつももう一步のところまで裏切られては、ため息をつく県民。はては、照ノ富士、琴奨菊、豪栄道と、他の大関たちにことごとく優勝では先を越される始末でした。それでも、県民は稀勢の里を見離さず、どこかで待ち続けていたのです。

そんな茨城県民に、今年の初場所、念願の稀勢の里・初優勝と横綱昇進が一気にやって来たのです。喜ぶ県民は口を揃えて言いました。「待っていました！」。

作家であり、後にも先にも唯一の女性の横綱審議委員を務めた内館牧子さんが、そんな稀勢の里の初優勝と横綱昇進に際して、何度裏切られても稀勢の里を待ち続けてきたことを新聞インタビューに告白しています。そして、こう述べています。私はずっと「バスがダメなら飛行機があるさ」と思って待ちました、と。

内館さんのエッセーにもなっている「バスがダメなら飛行機があるさ」という言葉。どこかの社長さんが、何度バスに乗り遅れるようなことがあったとしても、もしかしたらタイミングよく飛行機に乗れて、乗り遅れたバスよりも早く目的地に着くことがあるかもしれない、と言っていたことに彼女自身とても励まされたそうです。

そう、私たちの人生にも、滴を持して飛んでくる神様という飛行機があるのです！

クライスト・ファースト

「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」

(ピリピ人への手紙1章21節)

「都民ファースト」(小池百合子都知事)、“アメリカ・ファースト”(ドナルド・トランプ新大統領)…。今、～ファーストが大変流行していますが、あなたは一体、何ファーストでしょうか？

御茶の水キリストの教会は、来年(2018年)、教会創立七十周年の節目を迎えようとしています。そんな御茶の水の教会創立は、言うまでもなく神様のみわざに他なりません。人間として大きく関わった兄姉の一人に、宣教師のO. D. ビクスラー兄がおります。そして、そんなビクスラー兄のモットーは「クライスト・センタード」(キリスト中心主義)でした。言い換えれば、それは「クライスト・ファースト」(キリスト優先主義)ではないでしょうか？

御茶の水キリストの教会には、そんな「クライスト・ファースト」(キリスト優先主義)の精神が息づいているはずなのです。にもかかわらず、教会の伝統とか、信仰生活の年功序列とか、社会的ステイタスの有無とか、そういうものに左右されているとしたら、私たちには「クライスト・ファースト」(キリスト優先主義)の精神が希薄になってしまっているのではないのでしょうか？それでは、“キリストの教会”の名が廃りますので、名称変更が必要になるでしょう(“チャーチ・オブ・クライシス”とか!?)。

私がよく口ずさんだ子供讃美歌に♪イエス様がいちばん♪という歌があります。「どんなに淋しい時でも、どんなに悲しい時でも、イエス様がいちばん、イエス様がいちばん・・・だって、イエス様は神様だもの、だって、イエス様は神様だもの！」

霊的ルーティーン・ワークの大切さ

「そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。」
(使徒の働き 2 章 42 節)

「ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。」
(へブル人への手紙 10 章 25 節)

先日、山手線の車内広告で、ルーティーン・ワーク(=段取りや決まった手続きに従って行なわれる仕事や働き)を新鮮な思いできちんとこなしていくことこそが“できる人”になる秘訣だ、というような触れ込みの自己啓発本の宣伝を目にしました。ルーティーン・ワークと言えば、決まりきったつまらない仕事、マンネリ化しがちな働きというようなイメージが強いのではないのでしょうか？

しかしながら、そういうルーティーン・ワークの積み重ねがいかに重要であるかは、あのメジャーで 10 年連続 200 本安打や 3000 本安打、日米通算の安打数の世界記録を達成したイチロー選手が体現している通りです。イチロー選手の次の試合への準備は、前の試合終了後のロッカールームから始まるのです。談笑したり、飲んだりしているチームメイトをよそに、入念なバッドやグローブの手入れ。また、足腰を鍛えるためにエレベーターではなく階段を選び、膝を守るためには階段ではなくスロープを選択するイチロー選手。そこには、まさに、ルーティーン・ワークの積み重ねがあるのではないのでしょうか？「小さな一步の積み重ねでしか遠くへは行けない」(イチロー)。私たち信仰者にとりまして、大切なルーティーン・ワークがあります。毎日のディボーション、週ごとの主日礼拝、その中で行われる“主の食卓”やささげ物……。

信仰の体現者、ハリー・ファックス兄

「それと同じように、信仰も、もし行ないがなかったなら、それだけでは、死んだものです。」
(ヤコブの手紙2章17節)

新しい年、2017年の到来を待つかのように、今年の元旦、敬愛しますハリー・ファックス兄が95歳で天に召されました。宣教師の子供として日本に生まれ、自らも弟のローガン兄と共に日本宣教やキリスト教教育に大きく貢献したことは述べるまでもありません。しばらく前の説教の中でも触れましたように、昨年10月にハリー兄とスカイプ(映像付き電話回線)を通してお話をした際、ハリー兄が何か大きな覚悟をもって(=死を意識して)お話しして下さったように感じたことはお伝えした通りです。あれが私(野口)にとってはハリー兄との最後の会話になりました。

そんなハリー・ファックス兄は、教会の内外で多くの日本人に主にある証しを立てられました。ことに、今年の御茶の水のテーマでもある「生きて働く信仰」(信仰の具現化)、みことばの実践ということにおいては、良き模範を示して下さいました。ハリー兄には、こんなエピソードが残されています。

ハリー・ファックス兄が伝道の傍ら、学園で聖書の授業をしている際、一人の生徒が立ち上がって、宣教師たちの車使用や贅沢に見えた衣食住を責め立てたそうです。「私たち生徒が貧しさに喘いでいるのに、あなたがた宣教師が豪華な暮らしをしていたのでは、福音も何もあったものではない!」。それに対し、ハリー兄は俯き、開かれた聖書には涙が落ちたと言います。そして、その後、ハリー兄は即座に車を売り飛ばして自転車に乗り替え、洋服も農家から分けてもらったもんぺに、靴も草履に、お昼は日の丸弁当になったそうです。※後日、生徒たちの懇願で車は買い戻された模様。

生きて働く信仰

聖霊に導かれて、祈り、奉仕し、伝道する教会を目指して

「みことばを実行する人になりなさい。」 (ヤコブの手紙1章22節)

若い方は馴染みがないと思いますが、かつて三波春夫という歌手は「お客様は神様です！」をステージ(コンサート)の決まり文句としていました。要するに、歌を聴きに來てくれるお客様がいなければ、自分は生きることができない(生活していけない)という謙虚な思いから出た言葉なのではないでしょうか？

全く違う意味なのですが、教会でも「お客様は神様です」という言葉が妥当するかもしれません。それは、すなわち、教会では、そこに集う兄弟姉妹一人一人は、神様に仕える奉仕者であって、決して“お客様”であってはいけないという意味です。

元アメリカ合衆国大統領であったJFKこと、ジョン・F・ケネディは、その大統領就任演説で国民に対してこう言ったそうです。「アメリカ合衆国国民の皆さん、皆さんはアメリカに何をしてもらえらるだろうかと期待しているかもしれませんが、むしろ、皆さんがアメリカに対して何ができるかをこそ、考えてみて下さい」と。

正直申しまして、教会も大きくなればなるほど、その一員である教会員の教会奉仕者としての意識は低下し、逆に、サービスを期待するお客様意識が高くなってしまふものではないでしょうか？誰かがやってくれるはずだ、と考えてしまう訳です。

しかしながら、教会はコンサートとは違います。教会は新約聖書の原語ギリシア語で“エクレシア”、その原意は「呼び出された者たち」です。つまり、教会とは、主イエスに倣って、みことばを実行するために、つまり、祈り、奉仕し、伝道するために、神様の恵みのうちに救われた者たちが聖霊によって呼び集められた集いなのです。